



作文2部

農林水産大臣賞

「私のお米」

大分県大分市立舞鶴小学校六年

三重野璃乃

私は白いごはんが大好きだ。一日に一度口にしないと食事をした
気にならない。

そんな私が小さい頃から食べている、もう一つのお米がある。それは
私の曾祖母が白米と一緒に届けてくれる「やき米」だ。

「やき米」というのは、焼いたお米ではなくもみを水につけて、あげ
て釜でいり、精米にかけて、白などで押しつぶしてできた物だ。

白い米と比べると、色は青緑で形は平らにつぶれている、まだ白い
米に育つ前といった感じの物だ。

私にこの「やき米」を届けてくれる曾祖母は標高の高い山の中で暮
らしていく、気温も私の住んでいる所より随分低く、水の温度も夏でも
も冷たいと感じる位だ。そこで作られるお米は、気温や水温の低さ
により完全に育たない稻ができてしまう。その育たなかつた米をム
ダにせず保存食としてできたのが、この「やき米」だ。食べ方も白い米
と違い、炊くのではなく、そのままだつたり、お湯をかけてふやかし、
味付けに塩をひとつまみ入れて食べたりする。

曾祖母に聞いた話だと「昔は白いお米が貴重で、麦ご飯ややき米
を主食にしていた」そうだ。白い米が貴重だったのは、昔の米作りは、

現在の様に機械を使う事がなく、牛に荷物を運ばせ田を引かせ、人
の力のみの作業なので、近くの人、家族、小さな子どももみんな助
け合つて行つていたそうだ。

私達は毎日あたり前のように白いご飯を食べているが、それが作
る人の口に入る事が難しい時代があつたのだということに、私はど
てもおどろく。話をしてくれている曾祖母のとても曲がった腰を見
ると、その作業の大変さも解る気がする。

曾祖母から届く白米ややき米を、ただおいしくと食べていただ
が、色々と調べていくうちに、作る側の大変さや、その意味を知り、
食べ物をムダにしない気持ちが強くなり、私の口に入るまでの沢山
の事にも感謝の気持ちを持つようになった。

私たちの回りには食べる物があふれている今、「もつたいないやム
ダにしない」という気持ちがうすれていくよう思う。

食事をする前の「いただきます」は、「食べます」という意味ではな
く、作った人達への「ありがとう」の言葉だと私は思う。

もう少しすると、私の大好きな白米と「やき米」が届く。曾祖母
の元気だという知らせをのせて。私がご飯や「やき米」が大好きな
のは、曾祖母の元気な知らせが一緒にあるからかもしれない。

今日も白いご飯が食卓にある。最後の一粒まで、きちんと食べよ
う。作ってくれた曾祖母の顔を思い浮べ、「ありがとうございます」と感謝の気
持ちを持つて「いただきます」と言つてから。